

集まり來つた。曠野の囁きは、泉のあたりから起つた。鳥も獸も人間も、すべては水がその生活基調だつた。大泉といへば遠い武蔵野の彼方に想像せられた。今は交通路に沿つて市區が開展した。が、小金井近い深大寺あたりも同じく電車の沿線となつた。

防風林中の隣組

元來武蔵野は概して水に乏しい砂礫層で、従つて我等の先住民族はまづ流域を求めてそこに點々聚落を作つたことを述べた。近く江戸時代の地圖より推量すれば、臺地を中心とする各聚落への通路は、自然的に臺地上の屋根に相當するところを通つて居る。臺地の西半では、纏て自由自在な通路が開け、その街道に沿ふて街村若くは線狀聚落が發達した。こゝは新たに新田が多く開墾せられた、上水と井戸が出來てから一層發達した。

斯くて家と家と數戸が纏まり、防風林に囲まれた小さい隣組として進展した。水を得易い新田を目標に、三々伍々集り、それが後に至つて、武蔵野町附近の如く開拓村落を生

み、そこから條理整然、一個の組織系統を有つ新村落が成長した。

武蔵野の丘と流れと森の中の村はかくして漸次大東京の一翼とならうとしてゐるのが改狀である。

人間 獨歩

獨歩と釣

赤坂氷川町に獨歩の居たころ、私も彼の家に寄寓したことがあつた。氣の良い信子夫人の親切な友情は今も尙忘れずに居る。そのころ、長男の虎雄が生れた。その後、彼は麻布三河臺町に移つた。虎雄をよく近所の洗湯に連れて行つた。

「虎雄！ 虎の如く猛しかれ」
とよくその頭から水をぶつかけては、石鹼をぬりつけてやつた。虎雄は勇敢に父の手荒いのに抵抗し、突然父に挑みかゝつた。そして泣いた。風呂の中の人々は、この父と子との面白い争鬭を見て笑つた。

その虎雄は父に似て文學に興味を有ち、一時文壇に未來を約束されたが、今は上海に居る。魚釣りの名人で、親代りの眞山青果に聽くと、伊豆沖で大物を釣ると、玄人も舌を捲くほどの技術を有つてゐると。その父も釣が好きで、茅ヶ崎の病床でも釣のことを終始云つてゐた。よい竿があつた。釣の大家石井研堂から譲受けたものなどは流石に名竿で、獨歩歿後之が争奪戦さへ行はれたものだ。

エビ茶頭巾の専八老人

獨歩の父専八老人が常住座臥、宅でも外でも、寒中難さなかつたのは頭上の王冠、エビ茶毛絲の頭巾だつた。

頭巾を取ると、瘦せぎすの老人専八翁は、七十以上の齡を懸値なく暴露した。第一頭の大部分は禿げてゐた。この人は面白い人だつた。萬事無頓着で、我子獨歩一哲夫ほどエライ人間はないと思つて居た。貧乏さゝれて、苦しめられてゐながら、一切を超越して、そ

の子を絶対に信頼してゐた好々爺であつた。

「余には父あり、母あり、父は極めて暢氣濶達の人にして余を信すること篤く、而して亦貧乏には平氣なる人なりき。霞ヶ關に余の窮迫時代、澄める酒よりドロクが遙か旨いと眞底から喜んでドロクばかりのんでくれた人なり」(病床録)

後氷川町時代の専八老は相變らず、うす暗い臺所で、ひとりちびくんとドロクをやつてゐた。

「民聲新聞」を退いてからの獨歩は、何といふ定つた仕事もせず、ぶら／＼して居た。氷川町でも大分居悪くなりどこかへ轉宅の話などが出た。ある日、専八老人が「一つ家探しに出掛けやう。附合つてくれないか」と私を誘ひ、例のエビ茶の頭巾を被つて先に立ち、二人はあちこちを歩いてやがて芝高輪に出た。そこに一軒の門構の家「かしや札」が斜めに貼られてあつた。老人は「これを見やう」と横手の差配の宅から鍵を借りて来て、くゞり戸を開けると、長い植込があつて、表玄関から右手は洋間の應接室、廻り縁の四つ目

建、下が大小四間に、書生部屋、女中部屋、湯殿付、二階十疊に六疊に四疊半の化粧間、便所まで附いてゐる。綺麗に掃除が出来てゐる。老人は一顧見終り、

「うむ結構、これなら、いつでも引越して來られる」

下の十二疊は客間、椽側廣く、庭園は大きな松の木が二本、池などがあつて、緋鯉が泳いでゐた。

「こりア可い。キツと哲夫の氣に入る。家賃はいくらかな。一寸聞いて來てくれないか、序に鍵を返さう」

門の外で待つてゐる老人に「總附貸、家賃百二十圓の處、敷金三つくれ、ば百圓にする」とのことだといふ。

「さうか。百圓、左様だらう。うむ百圓と、早速哲夫に見に來るやうに云はう。やア御苦勞、時に腹が空いたな。蕎麥でも食はうか」

當時の百圓の家賃でビクともしない貧乏國木田の御隠居と二人で、この無鐵砲もの、私

等も既にこの家を借りた積りで、蕎麥を食ひながら、

「あすこの裏の木戸は用心が悪いぜ。あすこは矢張り板戸にするんだな」などといふ老人の横顔を見ると、どうも眞剣に考へてゐるらしい。

「酒、うむ、わしはドブロクだ。それを一合コップでな」と空想からさめた現實は、ザル一ぱいとドブロク一合で陶然たりで、うす磯れた財布から五十錢銀貨一つを出した。かくて雲飯を満たす二人だつた。

これは獨歩も知らぬある日の家探し風景だつた。噫々、この好々爺わが専八老人も獨歩の所謂人生の謎、驚異の死の手に攫へられて既に幾年、この高輪の家は誰が住んでゐるとやら、人生茫々總べて一夢だ。

二男哲二の後姿

獨歩は明治四十一年六月、茅ヶ崎兩湖院で歿した。時に年三十八。若死である。多望の

未來を土に埋め去つたことを人々から惜しまれた。

その後大阪で、獨歩の追悼講演會を私共が開催した、その席に童話家天野雉彦が來合せで、一人の青年を紹介した。獨歩の遺児哲二である。

背の高い、くつきりとしたよい青年だつた。父が歿くなつて七日目に生れた兒だ。父の顔は寫眞と人の語り草から探し出して略想像がついたと云つてゐた。雉彦夫婦は、この青年の養ひ親となつた。哲二は、先年東京美術學校を卒業して彫塑界で天才の名を轟はれ、卒業後間もなく名古屋市の少年公園の噴水盤の意匠に應募して、河馬が水を噴上げところを案出して、一等賞を得た。

哲二の噴水賞

子供たちは大喜びて公園に集まつた。

河馬はまだ名古屋の子供には未知の動物だつた。茶褐色の馬鹿に大きい鬘鬚、大きな頭

と小さい眼、不調和な形相が愛嬌だった。

哲二は思ふた。少年公園の添景としては、何よりも教育の資料になるものを選びねばならぬ。東京上野の動物園で第一の人気者は河馬だった。京都でも河馬が来てから子供がその柵の前に黒山を築いた。ことに水のものである以上、動物を使ふならこれに限るといふその着想は父獨歩の遺傳らしい奇抜さだった。

子供は天に向つて水を吐く河馬を手を拍つて喝采した。しかしそこには奇想天外の一工夫があつて河馬は活きた。恐らく一等賞の得点上、見のがせないところのものであらう。それは何であらう？

哲二は例の藝術心が手傳つて、どうもこの儘河馬を水から露頭させる文では智慧がないとあつて、鼻の先きに一びきの青蛙を乗せた。水はその背からも口からも、虹のやうに上つて煙つた。

「やア蛙が居らア」

と子供を歡はせたのはこの大きい青蛙だった。それで河馬は活きた。

道頓堀を歩く哲二

道頓堀の浪花座の前を人波に揺られて歩くわが哲二の後姿が、一際高く人々の中に抽んで居た。その頭に冠つたのは海老茶の毛糸の頭巾だった。勿論、祖父の趣味を誰からも聞かされた筈はない。然るに、その孫の頭にも矢張海老茶の毛糸頭巾が載つてゐた。その肩の四角張つて首の長く、沈黙でそれでも人の善さ相な哲二は、どこから見ても祖父専八の若いときそつくりだった。

雉彦と並んで歩いてゐるところを見ると、何といふ不思議の縁だらうと私に思はせた。

哲二はそのころ獨り、獨歩の「武藏野」の小品中によく出てくる吉祥寺近くの田圃の中の一軒家に居た。その家も彼自身の手によつて建てられたといふ。

當時の美術學校長の和田英作は獨歩の古い友人だった。和田英作は哲二に「父の胸像」

を作れと奨めた。哲二は「はい」と云つたが、今日までその儘になつてゐる。

小説「肱の侮辱」

獨歩にさる女學校が講演を頼んだ。彼は講演は好かぬと云つて断つた。強つてのことにそれではやらうと、友人らと共に出かけた。前席の辯士數人からむつかしい固くるしい話や、えらい人達のこと等をくどくどと聞かされて、うんざりしてゐる女學生達の前に、小説家獨歩は現はれた。

「皆さん、僕の話は何でもないことです。前の先生方のやうな六かしい理屈ではありませぬ。私は實際の話をしませぬ。さうだとなつては『肱の侮辱！』とします。

肱はいたづら者ですよ、これは皆さん方のやうな女の生徒さんぢやなくて、男の生徒、中學生のことです。ある學校の畫の先生のことだから、寫生の繪ノ具や、ボールドの白墨の粉を浴びてその洋服は汚れてゐます。中々それを買ひ代える資力もないので、破れた

ところは證ひ繕つてゐます。

髪は蓬々として、ぢぢむさい顔に垂れ下つてゐます。垢は襟に蚯蚓のやうに油ぎつて光つてゐます。髭はもしやく／＼してゐます。踵のちびれた靴を穿いてゐます。どこから見てもしみつたれで甲斐性なしのやうに見えます。口の中でもぐ／＼物を云つて、行動は遅鈍です。併し畫は見事で、親切な人です。

生徒はそのよぼ／＼した先生と逢ふと、義理に一寸目禮をしますが、先生が行過ぎると皆で肱につき合つたり、首をぢぢめたり、舌を出したりして、色々の綽名で嘲り合ふのでした。そして生徒等の敬禮に丁寧に頭を下げるその様子が可笑しかつたのです。

ある朝、講堂ではいつも例の如く、校長先生の倫理の話があつて生徒は謹聽してゐました。その隅に、畫の先生は小さくなつて畏つてゐます。それを見るとあつちでもこつちでも、肱につき合つて冷笑は畫の先生に集まるのです。

いくら教場で倫理を説いても、師父を尊敬しない生徒に何の教育的効果がありません。

況んや。この先生には一人の母親があつて、先生は朝早く起き出で、その御飯拵へをしたり、お給仕をしたりして學校へ出るのです。藝術上の良心から、暇があれば寫生に出て新らしい自然の氣分を取入れる爲めに懸命です。その體は、母と生徒との爲に捧げてゐます。それが何處に悪い點があつて、生徒から眩の侮辱をうけるのでしようか。百の空論、それが何に値しませうか。何百遍講堂で校長先生の倫理を聴いても、こんな立派な先生がたゞ外觀の目ぐるしく、むさくろしい爲めに、その心の美しさ、その魂の尊さを知らぬ生徒にどこに未來の幸福がありませうか。

あゝ「眩の侮辱！」卑劣な敗徳者！」

と見得を切つて壇を下つた。女學生らは、初めて心を打たれたらしい。恍惚として獨歩先生の爽やかな警句に富んだ講演から我に還つた時思はず拍手した。

「眩の侮辱」と題する小説が出たのはその後數ヶ月の後のことだつた。

鱒 と 鮭

獨歩の日記の中に、

「弟收二は悌弟なり。余の爲とならば殆んど身命を辭せず。稻垣（公使）と喧嘩して公使館書記の職を弊履の如く抛ち、暹羅より歸朝して予が家にあり、三度々々の惣菜に馬鈴薯をヘツドで揚げたやつをのみを食はせられて何の不平を云はず。貧兄のために虎の話か何かを翻譯して家庭雜誌に賣り、以て吾一家の米塩の資を補けたり。而してその贅澤に馴れたる外交官殿に偶々の御馳走といへば鱒か鱒なり。

余は決して不遇ならざりし」と。

明治文壇の奇才國木田獨歩はこの貧乏に苦しみながら、文學に没頭してゐた。かういふ彼の受難時代も長かつた。

鱒といへば、今は文壇の大御所、獨歩の大知己徳富蘇峰も、明治十九年に、熊本の家を

疊んで東京に出たころ、僅かに月三十圓の収入のみだけで一家數人が極めて質素の生活を營みその中から若干餘裕をとつて、老親夫婦の避暑の資を剩した時代があつた。その會計一切のきりもりは若き蘇峰夫人の血の滲むやうな慘憺の工夫から出たのである。そのころの蘇峰は、來るべき將來の志に燃えながら、而かもその食膳には「家族が一ヶ月の副食物としてたゞ一尾の鮭あるのみ」であつた。

「牛肉と馬鈴薯」

「牛肉と馬鈴薯」一題からして人の意表に出た作である。牛肉と馬鈴薯とは、二つの趣味の對照である。かういふ對照はよく我等の現實社會に見る事實である。

馬鈴薯黨を以て精神生活者を表現した獨歩自身の趣味と、その對照とを小説の形を以て書いたのがこの「牛肉と馬鈴薯」の一篇である。これは純然たる彼の人生觀を端的に表現したものであつて、又一面小説を藉りた一大論文である。

獨歩はその構想について、創作前、必ず知人らに話すことを例としてゐた。私も「牛肉と馬鈴薯」を人事のやうにして何遍も聞かされた。

さてこの得意の小説が出来上つた。

彼の癖として、物を書く前は、無暗に昂奮し、非常な神経質となる。私など何遍もその的となつて、彼の昂奮の矢面に立つたか知れない。著書の中にも、

「余は小説を書き出す前、必ず昂奮す。心焦り氣怒りて、總ゆるもの皆疝癢の種なり、斯のごときこと五六日に亘る。されば家人等は余の創作時を恐れて、なるだけ觸らぬやうにして置くらしむ」

と述懐してゐる。

「牛肉と馬鈴薯」は獨歩の中年作の第二期劈頭に置くべきものである。

この小説は、三十何枚かの短篇であり、毛筆で綺麗に改良半紙に清書し、朱で一々丁寧にルビを振つてあつた。この勞作を目のあたりに見てゐた私は、彼の敬虔、眞面目なこの

汗と涙との力作が、幸先よく直ちに雑誌の巻頭を飾るべく祈つた。

最初私はこの原稿を預つて、之を金港堂（日本橋本町にあつた教科書出版の大書肆——）會つて小説雑誌の先端を切つた「都の花」の發行元）の大雑誌「文藝界」の佐々醒雪主筆に紹介したが、體よく斷られた。それがそもくで、ケチが附いて、どこでも振られ通した揚句、大阪の金尾文淵堂で發行してゐた小天地に拾はれた。その編輯者薄田泣菫は獨歩の作品には少なからず敬意を表してゐたからである。東京の各方面で冷遇せられた「牛肉と馬鈴薯」は大阪に於て測らずも知己を得た譯である。爾來「小天地」と獨歩とは關係が結ばれ、その後の小品「巡查」「非凡人」「少年の悲哀」などの諸篇が「小天地」の紙上に發表せられた。

「巡查」の主人公

獨歩が明治三十五、六年頃、西園寺邸の門長屋の一室を占領してゐた當時、私はラム酒

一本を提げて彼を訪ふた。門衛の高野巡查も非番で獨歩の室に遊びに來た。

公爵は熱海行でそのころすつと留守、女主人公はのんきな人。女中も書生も仲々してゐた。獨歩はラム酒一本では不足相な顔。それでもいろいろと氣焰を上げた揚句、高野君が「先生の話は何度聴いても面白いが、戀愛談は素敵に面白い……と申しては如何ですが實に神聖で可い氣持です」とこれも碎けたところを言つた。

「いやもうすつかり忘れて了つてゐるのを、君に煽てられて、いつも饒舌らされるよ」と彼は笑つた。

それでも興に乗つては、人の話をするやうな顔をして、若いころの戀の經緯を話したりした。

聽上手の高野巡查は、要するに西園寺家の護衛巡查である。駿河臺の西園寺邸の門の左側に嚴しい服装で、出入を睥睨してゐる丈で、こゝでは更めて誰何するほどの人は出入しなかつた。

馴染のない人には、直々對面せぬ公爵だつた。それでも會へば物腰柔らかな、話上手な寛厚な紳士だつた。

公爵の人となりでもあらうが、この家の人々は、別に七六かしい應對の要らぬ人達で極めて素直な生活そのものだつたので、獨歩もすぐ皆に馴染んだ。

「昨夜は遠征でしたな」

と或る日高野巡査は痛いところを刺した。前夜獨歩は私達と神田のそば屋で飲み、上野で飲み、又神田へ戻つて、ラム酒を散々ひつかけて門限に外れ、外堀を攀登らうとして轉げ落ちたのを高野巡査が知つて門を開けたのである。

「その話はしつこなし、さア一杯」とラム酒の壺の口を客の方に向けて

「コップできゆつとやるさ」

小説家と非番巡査とはよい氣になり更に、そこで一番と碁盤に向つた。

小説「巡査」はこの高野巡査の生活を書いたものである。

「自分は人相のことをよく知らぬが、圓い顔の口髭、頬髯ともに眞黒で、鼻も眼も大きな見た處は柔和の相貌とは云へないが、さて實際はなか／＼の好人物なのが世間に随分あるこの巡査もその種類に屬するらしい」

全くそういふ容貌の人だつた。指物屋の二階の一室に間借をする獨身者、世帯道具一切をこの一室に置き、その中に生活してゐて、非番以外の日は西園寺邸の請願巡査詰所の角卓子の前に腰かけてゐた。邸の方は別に用のある譯ではない。

酒は石崎から「澤の鶴」を一樽もとつて「ちやぶ臺には、煮豆、數ノ子、蜜柑、醉章魚といふ風なものが雜然と並べてある、柱にかけた花挿には、印はかりの松ヶ枝、冬の日脚は傾いて、西の窓をまともに射し、主人の顔は赤く、眼はとろりとして、矢張正月は正月らしい」「全く一人は氣樂ですよ、さア熱いところを一ツ」と、ある日獨歩はこの巡査の家を訪ふた時のことを詳しく書いた。

机の抽斗から草稿らしいものを五六枚出してその一枚を獨歩の前に突出した。漢文で、

「願警察法」といふ一篇

「夫れ警察の法たる事なきを以て至れりとなす」

といふ一種の口調で、體軀をゆすりながら漢文を朗讀しだした。

「事を治むる之に次ぐーエどうです」

から始まつて、詩は「幼學便覽」で出來るといふのが二三ダース。「春夜偶成」だの「粧門所見」だのと、大臣警衛當時の「權門暮夜哀を乞ふ頻りなり、朝に見る揚々として良氣新なるを、妻妾は知らず人の罵倒するを、醜郎滿面髯塵を帶ぶ」はどうですと來る巡査だ。

この小説が出來て、西園寺邸の門長屋の八疊、新しい椽側に蒲團を持出して、門衛の高野巡査に讀んで聞かしてゐた時の獨歩は朝つばらから、又ラム酒を一ぱいやつたらしく舌がもつれてゐたと云ふこともある。

西園寺邸から持出した「欺かざる記」

「欺かざる記」は分厚の青野紙に書いた二冊本、各七八百枚づゝを一綴にしてある。丁寧な字、ぞんざいな字、何れも毛筆で書いたもの、明治二十六年に始まつて同三十年に終つてゐる。

その内容として人生問題として煩悶時代の青年期、早稻田専門學校を廢める前後から、佐伯の英語教師時代、東京に復歸して國民新聞社の從軍記者、愛弟通信、それから猛烈な戀愛時代、逗子の下宿での新夫婦の初世帯、戀の破綻から苦惱の一節を綴つたものが、何百枚もつゞく。事實之が彼一生の體驗中の大體驗、十年の學問に優る深刻な一年間であつた。

どこへ行つても離さぬ「欺かざる記」を最初私の下宿に預けて行つたが、西園寺邸に落着くと私から取戻して、ぼつ／＼抜き書などをしてゐたが、突然私の下宿（南甲賀町だつたからスグ陶庵邸の裏）へ來た時、この大事の虎の巻を入れた小さい手提柳行李を提げて來

て、「愈々決烈！ 皆持つて来た。といったところがお荷物はこれ丈だ。幾らか残つてゐるのは、公爵家の或る女性への未練だ。それよりも氣の毒なのは濡衣……」と云つた譯のものだ。まア可いさ。どうでもなれだ。それよりも落行く身の宿をどうする」と他人事のやうに云つて、同情した私と二人で飄然當てもなく新橋に駆けつけ汽車に乗つて鎌倉へ落ち、あちこち家を捜して大佛さんの前を通り観音堂の横に出ると、境内の長屋の窓から首を出して外を眺めてゐるものがある。

樗牛、高山林次郎だ。そこで樗牛から貸家の所在を訊いた。

鎌倉の家

鎌倉権五郎神社の脇に新建の家がある。家賃は八圓。三疊、四疊半、八疊。その界限は空地で、家主は権五郎神社の神主さん。お賽銭で建てたかどうかは知らぬが、畑をへだて、もう一軒、これは少し狭さうなのを建増さうと大工がカン／＼やつてゐた。

鎌倉も場末で、星月夜、古井戸の傍を腰越の方へ細い道が通うてゐる。こゝの坂も由緒ある坂だ。昔鎌倉武士が鎧甲で力み返つたことが繪のやうに想像に上る。腰越といへば新田義貞が佩刀を抛げて海神に祈つたところ、屹立せる断崖の向ふは太平洋だ。

極楽寺は右に、左の小山には墓地があつて、その岬の鼻に腰かけて、相模灘の入目を見たことも度々あつた。

新木の匂ひ心地よい新居に、小さな柳行李を一ツ抱えて来た二人の風來坊。西園寺家から出て来た獨歩と私とは、家主さんから借り出した大きな机の前に、これも蒲團屋から附たり座蒲團三帖、皆日歩の錢がかゝつてゐる。臺所道具萬端は荒物屋のお内儀さんが来て調へてくれた。米は米屋、酒は酒屋、肉の通まで、臺所に下げて行つた。饅頭は西洋もの燻鯛とサウセージ。パンもあれば、バターもある。文名噴々たる國木田獨歩のその文名を知る人はないが、東京の西園寺さんの家に居たといふのが何よりの保證で、返子の徳富先生の名によつても後光がさし、同じ鎌倉には、濱に西洋館の所有者押川春浪が居るし、そ

の友達の永井荷風も光つてゐた。

獨歩は可い氣になつて、遊びに來た田山花袋と後山で野蒜を採り、正岡藝陽や押川春浪らと八幡前で大弓を引いたり、海岸で角力を取つたりしてゐた。

たまたに雑誌「明星」に何か書いても一文も入るぢやなし、月末が迫ると急いで私は近く仲間入をした原田東風と二人で、へんじよう金剛、筆から出まかせの歴史ものを鉛筆のやうに延しては一月一冊の單行本、神田鍛冶町の赤本屋大學館へ賣つては三人の小遣をしてゐた。

東風は越後の産、正直一方の快男子、これは酒と來ては目も鼻もないが、醒めた時には生まじめな感激性に富んだ人物、短氣でよく怒るが、すぐ打解けては口を尖らしてのんきな話をしてゐる。獨歩は三人中の大兄哥、滅多に雜役はせぬと構えてゐても、私は元來のなまけもので、茶碗を洗つたり、米を炊いたりは出來ぬ。東風は堪りかねて、當番を定め、公平に役割を命じなからその第一日にまづ宿醉で頭が上らぬので其日は掃除もせず、めし

かず、茶碗はその儘バケツの中に沈んでゐる。

獨歩は

「怪しからぬ奴らだ、僕は自炊の経験もある。東京澁谷時代に佐伯の青年らを引率して來たが、何れも前途の光明に緊張し切つた仲間て規律正しく、誰一人の違犯者もなかつた。錢のない時は、一日一斤のパンで五人が餓を凌いでも不平不足をいふものもなかつた」と呟きながら、臺所に下りは下りたが、手の付けやうもなく、しきりに私を呼んで何とか飯の食へるやうにせよと催促する。併し自分は竈の下を焚火つけやうともせぬ。

彼曰く「貴公は神主さんのとこの女中氏と仲が善い。一つ頼んでめしを焚いて貰つて來い。序に香の物を貰つて來い。足の序に牛肉屋へ行つて、ロース二斤持て來させよ」かういふ風の生活が永く續きそうな筈はない。

私がそこを去る前には、正に是秋風落寞、鎌倉どのに追立てられ、壇の浦に落ち延びた平家の白旗同様だ。獨歩は一寸東京へ行くと云つて歸つて來ず、東風もそれを追かけて呼

びに行つた留守に、私がたま／＼大阪から歸つて来て、獨居の面倒さに内から錠をかけて
寝てゐると、表にがや／＼と人の足音、

「儲にきのふまで居たんですか」と夜遁げでもしたと思つてか巡査の聲までしてゐる。

「一度明けて見たら何うです、首でも吊つて死んでるんじゃないでせうか」

と今朝井戸端でちらと私を見た家主のお内儀さんが餘りに静かなので私を益首男にして
了つてゐたので、思はず噴笑した。

葦山の溜池

私の家は攝津高槻の山麓にあつた。

その松茸山は、秋が一番山らしい機能を發揮した。全山赤い雌松でそれが艶めいて來

る。雨は根笹の露とぬれて輝く朝日は微風を伴つて静かな松ヶ枝を鳴らした。浅い宵雨の
霽れた朝はことに美しかつた。其處に池があつた。エビモ、クロモ、シヤチモなどの生茂
する武藏野の古い池が彼の目に浮んだ。しかしこの山の池は泥土が、青い苔を綴る外、
滑らかな水面だつた。

關西の旅に出るたびに、獨歩は私のこの山裾の村山莊に獨歩は必ず寄つて行つた。一泊
、二泊、三泊と重ねたこともあつたが、この池に來たのは初めてだつた。

明治二十九年だつた。秋もやゝ更けて、林の小路には、槿紅葉し、雜木の色が美しく、
四十雀、小雀、エナガワの群が戯れ合ふ頃だつた。ぼつりと櫟の實が落つる音がした。リ
ンドウの紫色があちこちに曉の星の散りはふかとも思はれた。

ばらりと枯松葉が風に散ると、餌に餓えた池の小鮒がそれをばくりと啣えて沈んだ。松
の根が土の上に露はれ、松葉が茶室の庭のやうに美しく落ち布ひてゐる。そこに獨歩は坐
つて釣竿を垂れてゐた。その手は顫ひ、その頬はこけて眼は冴えない。たゞ例の甲高い

笑聲と澄んだ聲の調子とは尊い氣持の彼の不屈の魂が思はれて一層の佗しさへ感ぜられた。

獨歩社が破産前の苦しい算段に疲れた彼と二人で、この池の畔にかうして無言でしばらくあつたことは私にとつては悲しい思出の一である。

餌につかぬ魚は時々浮標を動かすのみで一向釣にかゝらぬ「エツ」と彼は竿をやけに上げて、

「釣れた〜。池が釣れた！」

興も根氣もなう竿を抛り出した。行厨を開けた。枯枝を拾つて來た。小石を積重ね、藥罐をかけて、沸上つた湯に、炯徳利を投げ入れ、何は扱置き、「さア一ツ」と二人は飲んだ。絶えて久しい酒宴である。

「武藏野には、もうかういふのんきな隠れ家はない。どこへ行つても人間がうよ〜と居て、われらの武藏野時代は既う夙うに亡びつゝある」と彼はくりかへした。

「こゝはいかにも武藏野の雜木林を思ひ出させるほど、溟葉樹が多い。あの禿になつたところに枯芝があり、茶畑があり、又その向ふにクヌギがあり、日光うら〜かに鳥の羽がかゞやいてゐる。丁度僕の書いた武藏野の森を思はせる。ツルゲネーフの書いた『あひびき』の林の中に居るやうな心地がする。あゝ酒が腸に滲み入る」

といかにも人間社會と隔離したこの一瞬が怡しさうだつた。

「松茸がないかなア。獨歩先生の爲めに、一本位残して置いても罰が當るめい。氣の利かねえことだ」

と彼は、松の根をごそ〜探し廻つた。

雨上りの土を抽いて雜茸があちこちに頭を擡げてゐる。關東のナラ林にもよくある黄茸の一種である。

「これはどうだ、毒でも構はねえや。『茸食て死ぬ夜は佗し時雨する』か。生か死か、紙一重の樂屋と舞臺、人間芝居もよい加減に打上げるかな」と彼は痛む持けつを後手で抱えな

がら、茸を探してゐる。

後れ茸を籠に入れて村の子供らが山を下りて来た。

「有るか／＼」と駆けつけて、その籠の中を覗いて「素敵だ々々。よくあつたなア。僕に一本おくれよ。お金をやるから」

「お金要らねえや、一本やろ」

と惜気もなく傘の開き切つたのをくれた氣前に對し、彼は無理に銀貨一つ握らせて、

「さア、これを下地に又始めやう」

枯枝をもやして、焙つたのを旨さうに食つた。そして云ふた。

「こればかりは、東京では出来ない。事實、東京の野山は東京人に似て見かけ倒しだ。肝心のものとなると大阪に限る」

この池も湧泉である。東京郊外の池は元來が、處々の地層から自然に湧いた水溜りである。井ノ頭池も、三寶池も皆さうだ。そこに自然の水草が生長してゐる。この池も矢張さ

うだ。併し僕はそろ／＼武蔵野が東京の人文的浸蝕を受けてやがてはこの天然の静かさを破つて電車が通ひ、遊樂地となり、ボートが浮び、浮藻の花をむしり、周邊を荒すだらう。そしてそこに池の持つ周囲の自然が壊されることを想像せられる。あゝ武蔵野の池の持つ幽寂はいつまで続くだらうか。

併しこの獨歩の生きてゐる中は憚りながら、東京もさう一足飛びには破壊されまい。死んだ後はドウともなれ！」

と彼は例の我利々々論を出して、ヤケに笑うのであつた。

あゝ！ 彼がこの世を去つた明治四十一年頃よりの東京郊外は果してそろ／＼西洋風建築が雑木林の間を浸蝕し始めた。

東京郊外にコスモスの紅白が秋風に飄搖する。コスモスは武蔵野攻圍軍の前哨戦として可憐な姿を以て滔々と近代思想の先驅をして來たのである。

「時にどうだ、まだ貴公に賣る田地があるが、この山も賣つて了へ。俺は實際貧乏してる

金がないと東京に歸られぬい」

と冗談のやうにいふ彼の一語は、私の胸に匕首をつきつけたやうだつた。

獨歩、愛する詩人獨歩！ 武藏野の詩人獨歩が獨歩社以來の心身の疲れ、そこに彼の士族の商業が累してやがて来る渡手形處分の暗い影を深刻にその心に宿してゐた。

酔うた彼の衰へた身體のどこかに、うら淋しいものがあつた。そのころ彼は不治の疾患に囚はれてゐた。その眼の底にやゝもすればはふり落ちんとする涙を見た。

獨歩の小説「破産」が出たのはその後のことだ。財的にはほとんど破産に近い運命にさいなまれながらも、彼は尙も生くべくあらゆる精魂をかたむけて運命と闘つた。花は一時に咲いた。しかし悲しい哉。嵐は彼を待受けてゐた。

「獨歩と武藏野」を書いてゐると、かういふ風の古い記憶が、私を悲しい彼への回想にするべくと導くのである。

武藏野詩人の碑

大東京市の外廓に武藏野の幽邃區を永遠に護れ。曰く多摩川べり。曰く小金井堤。曰く多摩丘陵、井ノ頭、三寶池、狭山臺地、飛鳥山。

ことに小金井は獨歩の一生を通して眷戀已まざる處だつた。諸君若し、この才人の爲めに、未死の魂を弔はんとせば、相讓して小金井橋近く、一大櫻樹の下、獨歩碑の建立を企てゝは如何。而してその碑は蘇峰の雄筆を待つべきか。小金井は孝子蘇峰が、その父洪水と最後の交歡の地だ。彼此相依つて絶唱をなすだらう。

小説「源をぢ」

私は小説「源をぢ」が好きだ。

「大空曇りて雪ふらんとす。雪はこの地に稀なり。其日の寒さ推して知らる。山村水廓の

民、河より海より、小舟浮べて、城下に用を辯ずるが佐伯近在の習慣なれば、番匠川の河岸には何時も渡舟集ひて、乗るもの下るもの浦人は歌ひ、山人はのゝしり、最とも賑々しけれど、今なほ淋しく、河面には霧たち、灰色の雲の影落ちたり。大通り何れもさび、軒端暗く、往來絶え、數多き横町の道は氷れり。城山の麓にて撞く鐘は雲に響きて屋根瓦の苔白き此町の終より終へと物哀しげなる音の漂ふ様は、魚すまぬ湖の真中に石を一個投げ入れたる如し。

祭の日など、舞臺据えらるべき廣辻あり、貧しき家の兒等、血色なき顔を曝らして戯れず。懐手して立てるもあり。此處に來かゝりし乞食あり。子供の一人「紀州々々」と呼びしに振向きもせで行き過ぎんとす。「源をぢ」世にすねた紀州は獨り淋しき存在である。

「夜は更けたり。雪は霰と變り、霰は雪となり、降りつ止みつす。離山の端を月はなれて

雲の海に光を包めば、古城市宛がら乾ける墓原の如し。山々の麓に村あり、村々の奥に墓あり、墓は此時覺め、人はこの時眠り夢の世界にて故人相まみえ泣きつ笑ひつす。影の如き人今しも廣辻を横ぎりて小橋の上を行けり。橋の袂に眠りし犬頭を上げてその後影を見たれど吠えず。あはれ、此人墓よりや脱け出でし、誰に遇ひ、誰に語らんとて斯くはさまよふ。渠は紀州なり」(「源をぢ」から)

これは佐伯の濱を彷徨ふ乞食紀州を主題として、老渡守源をぢの最後を描ける獨歩の初期作に屬する名品「源をぢ」の一節である。

鷗外と紀州

森鷗外は、また「源をぢ」の愛讀者であつた。「若き獨歩の饒かなる自然鑑賞の力強き作品「源をぢ」は二個の人物、老いて子なき渡守と、稚うして母に死なれたる乞食との間に結ばれた人間愛を描いた佳作である。紀州は殊に面白し。その痴呆的な一面もよく描かれ

てゐる。摩痺したその頭腦に、恩人の死も畢竟心の空洞くわうくわうに何の感應もなく。町の芥箱から腐れた魚の腸などを漁り食ふ紀州の胃はよくこの種の人に在る不感症化で硬化してゐた。彼は肉體的に化石してゐた」と流石に醫學者らしい觀察を下し、又「紀州の胃は犬の胃に似てゐる。胃の機能が人の感覺に及ぼす點にまで書き到らば一源をぢは更らに一層、科學的に完璧な作であつたらう」と言つた。私は親しく之を鷗外から聞いたが、作者にこのことを云ひ傳ふる時を得ずに終つた。

「春の鳥」と「少年の悲哀」

獨歩の作品中「春の鳥」と「少年の悲哀」との二作について彼は私に語つた。

『春の鳥』は佐伯の教師時代、同地にあつた白痴の少年の哀れむべき最期を描いた事實小説である。余は當時、この子供を教育し、啓發し、誘導して物にすべく努力せんとした。その母がいかに白痴の少年の爲めに自屈し、心配してゐるかを見るに堪えなかつたのであ

る。しかし腦の組織中、或る一部に障害があつて、全機關の作用に支障を及ぼしてゐる以上この根本を除き去らうとしても到底出来ないことを後に長く之を試みて知つた。世の所謂教育は或程度までしか我等の手では目的を達し能はないことをも知つた。即ち人間には人間を創造することが出来ない。國民教育から大學教育に至るまで、それは相手の持つ智能を發見し、それを或る程度まで引伸ばす事の外威力がないものであることを知つた。哀れなる少年は鳥の飛ぶのを城の石に踞つて見てゐたが、何思つたか、ひらりと自分も兩袖を張つて、その眞似をするかと思れば、高い城壁から下に落つこちて死んだ。余は勿論、この少年を哀れと思ふた。彼は白痴の子を失つたその母の愁歎を見て泣かされた。これにヒントを得てこの一篇を後日書いたのである。

『少年の悲哀』は余が二十三歳の頃、豊後より東京に来る時、柳井津にしばらく逗留して、その山に上るのを日課としてゐた。頂上に祠があつて、風光が極めてよく、柳井津の町を瞰下し得て、余の心を怡ましめた。而して余はほとんど毎朝の如く此山上にて會ふ

た女があつた。十六、七の顔色蒼褪めて背のすらりとした少女だつた。友禪模様を置ける金巾の小袖をだらしなく着てゐた。ゆふべの白粉が襟の邊に残つてゐる處から見れば、いかげはしい種類の女とは一目に知られたが、その面長にて睫毛の長き、實に印象の深い顔の女だつた。何時も白壁に凭れて、便りない目遣ひをして澁乎と向ふを見て立つてゐた。その姿がいつまでも余の眼の底に残つてゐた。何となく哀愁を覺えた。知れる者なら、尋ねて話して見たい氣もした。

柳井津の町は入江に臨み、家々の燈が水に碎け、旅愁をそゝる。そこを背景として、この女の境界にありそうなところを想像して書いたのである。

いづれも寥々たる短篇である。が、余の道樂を云へば、かういふ小品を十種位集めて、瀟洒たる一冊子にして見たい。

『馬上の友』『空知川の岸邊』『鹿狩』『號外』など既成の作品と共にして一部をなし得るだらう。之を『獨歩小品十種』と題して本の意匠も自分で凝らしたい。

然し彼の遺作はその後さまざまの形で發表されたが、この小品集は未だに出ない。

第一「獨歩集」

獨歩の作品を集めて初めて一本としたいと私を通して申込んだのは銀座の細川書店だつた。これは銀座三丁目の角を引廻はした大きな洋紙問屋、その若旦那細川芳之助といふ人。よく東京の若い旦那衆の持つ上品さで、瘦せ形の色の白い溫和しい人柄だつた。さきに私の小品集「荊萱集」を出した人である。獨歩は快諾し、之を「獨歩集」と名づけた。

獨歩はその劈頭に「予は人氣なき作者なり」と當時の心境を序して出版した。黄色い表紙の無造作な四六版。人氣なき獨歩の集としてふさはしいものだつた。獨歩は「予の不人氣は必ずしも作品が拙き爲ではない。人氣はまた別である。今に滿都の人氣を一身に負ふ時があるかも知れない」との意味の語を以て序文を結んだ。彼は自からの作品を璧とも錦とも信じてゐた。この人氣なき作者獨歩が何んぞ知らん。後年その断片零墨をも争ひ求め

られて、一巻出づることに洛陽の紙價を高めるに至らんとは。

獨歩は小説を以て「人生の報告書」と云つた。すべてを有りの儘に描くべき良心が藝術家の道徳だと主張してゐた。恐らく彼ほど、啞を憎んだものはなからう。而かも「予には道徳なし。自から耻ぢざるを以て道徳とす」と云つたのは一生啞なき生活を尊重した彼の身上である。彼は懸引などをすることを耻とした。彼の作品のすべてが欺かざる記録であると同時に、彼自身その生活に於て、一毫の虚偽をも許さなかつた。感情家として彼は實に深僻であつた。

彼を以て、明治文壇に於ける一個の天才として安く片付けてはいけない。彼は深い思想上の煩悶兒だつた。彼は不斷の精進をした。彼は日本精神の精髓に西歐文學の肉をつけたる偉大なる人物であつた。彼は基督教に養はれたが、遂に満足せず、人間としての眞實をあらゆる方面から求めて已まなかつた。彼は藝術を以て人間の生命に觸れんとしてゐた。彼の宗教的な思索は藝術に於て、やゝその安定を得た。彼は徒らに愛國を口にしなかつた。

が、彼は藝術則ち文章報國であると確信した。彼は決していふところの自由主義者ではない。彼は吉田松陰、本居宣長、平田胤篤を研究した。「明治維新は志士の復古運動である。我等も文藝を以て、國家的奉仕をせねばならぬ。則ち日本人は最も高尚な眞理に立つて、世界を指導せねばならぬ」とつてゐた。彼は毅然として立つた。彼は實に此點に於て飽まで「獨歩」であつた。

人生の探求者

明治二十六年十二月―彼が二十二三歳の頃から、彼の人生探求者としての態度は定つてゐた。

彼は「欺かざる記」の中に、

「余は自から何かを書かんと試みに題材を選び記したるものを見ると

◎芳島と女島との間の渡守り

◎女島にて見たる水門を下せし若者

◎船路町より木立村の間を渡す舟子

◎十二段(山名)の山腹に逢ひし老樵夫

◎こじき紀州(人名)

これは彼が豊後佐伯の青年教師時代の日記の端に書つた彼のノートである。「一個の人間を思ふ時は同情に堪へぬなり」と日記の一節に記しつけた。その當時、ワルツワースの思想は彼の思想の大半を支配してゐた。前の項目ので、彼はまづ乞食紀州を書いた(前掲「源をぢ」)

「勿論、余は後年ツルゲネーフを読み、トルストイを読み、モーパッサンを嚙りてその感化をうけたるには相違ないが、以上の所説により、余は遂にワルツワースの流を擱んで之を信じて之によつて立つた一人たることを證明して餘があると思ふ」(日記から)

ツルゲネーフと鐵斧生

二葉亭四迷は翻譯家として當年隨一人者として畏重せられた。獨歩は彼のツルゲネーフの譯文を特に喜び、その著「武藏野」にも、屢々「あひびき」の文章を引用した。ツルゲネーフの繊細な自然觀察と、心理描寫は在來我國文學者の感覺に新らしい一脈の香氣を漲らしめたのである。しかも、二葉亭の譯文はよく原文の味を活かした。

獨歩の作風はツルゲネーフに影響を受けたことが少なくなかつた。「うきぐさ」も愛讀してルージンの性格描寫に、彼は傾倒した。

獨歩の歿後、その遺稿整理の時、文匣の中から日本紙の一綴を發見した。蟻のやうな細かい楷書で丁寧な筆寫したのは、二葉亭譯「めぐりあひ」、「酒袋」を一字一字克明に寫し取つたものだつた。而してその終に鐵斧生寫すとあつた。鐵斧生は哲夫の本名をもちつたものである。

ころは、その祈り得ぬ心を救つて戴きたいことです。それです。衷心から禱を捧ぐることを得たならば、その時は初めて直ちに救はれ得るだらう」

そして彼は恩師の手を握つて泣いた。

獨歩はいかなる場合でも自からを欺けない人であつた。

植村牧師は、たゞ黙つてその愛弟子の眞實の心を読んで、同じく瞳の底から湧く涙を抑へ得なかつた。教會に歸つて、家人に向つて言つた。

「あゝ彼は救はれた。祈り得ないと云つて泣いた國木田君の態度は我等の求めて已まなかつたものだつた。併し、彼は遂に不幸な人であつた」

その教會にはいたましい獨歩の戀の記録が残されてゐる。彼は時々瞑想して、その第何列目の何番の椅子に坐つてゐた妻の信子が、そこを立上つた時のことを思ふた。

「僕は、男子席の前方にあつて、植村牧師の説教の中に溶け入つてゐた。その時僕の手から逃げやうとする信子が余の後列の椅子にそわ／＼とした心をわざと平氣を装うて、牧師

の説教も上の空なる定まらぬ瞳をしてゐた信子その時が想起される」とよく話をした獨歩が私の目の前に泛び来る。

岡本の手紙

小説「牛肉と馬鈴薯」の中の岡本は、彼自身のことである。國木田獨歩の思想は簡約してこの小説の中の數頁に盡きる。彼はその中に次の如く記してゐる。

「わが願は世の常の願に非ず。この願ひの叶ふ時はいつなるべきか。わが命の此世にある間、叶ふまじと覺ゆる。もし然る時は、われ五十、七十、百歳の壽を保ち得んも、それは空しき夢の命のみ、われは此世の人の命をば夢の如きものと觀することなきにあらねども、人生は眞面目なるものなりといふ信念ぞかし」(牛肉と馬鈴薯)

「古池や蛙とび込む水の音」に豁然大悟した俳聖の悟りでもない。色即是空と徹底した佛者のそれでもない。彼は現實を遁じて、天地の大法を見んとし、事實を事實として、そこ

彼はかくツルゲネーフを耽讀し、筆記し、そこから何らかの得るところあらんとした苦心の迹が讀まれた。併し彼には彼の本領があつて。

「一個人を深く観ることは、あらゆる歴史を見ること也。あらゆる宗教を見ること也。あらゆる詩歌を見ること也」

と告白した如く。彼の作品はこの態度を以て一貫した。

「悠久にして不思議なる、生死を吞吐する、此大宇宙一爾がいかにしてもがきて飛び出さんとするも能はざる此大自然。事實中の大事實、當面の眞理に就いて何の事實を直寫したからとて、それは一藝當たるに過ぎない。斯くて文藝何の値ぞ、自然主義何の値ぞ。」これ、自然主義氾濫の當時、彼も亦一個の自然主義派の作家とせられたに對して、その特異な立場を表示した一大宣言である。彼は我國の持てる最も高く、最も大なる人生報告者としての天分を語らうとしてゐる。私は、獨歩が、常に矯々として、氣骨を把持して毅然として、その信念を守るに忠實であつたのを畏敬する。

り得ぬ獨歩

獨歩の一生を貫いて、その世に立つたその姿は「毅然」の二字で盡きる。彼ほど明白に自己を立通したものはない。而かも彼がかく自から守るところがあり得たのは、その思想の根柢に於て、人生の悠久に對する驚異の觀念に終始し得た眞實心の賜である。

彼の三十八年の生涯は常住生臥、この問題に思ひ煩つた。不休不息、求信求道者として彼の立つ様は、實に何人も犯し得ない毅然そのものだつた。

キリスト者のいふところの神の願ひ、祈りさへ彼の信念は斥けた。

病苦に堪え得で、輾轉する時、恩師植村正久は枕頭に彼を訪ふて、彼の爲めに祈り、且つ君も共に祈れと云つた。獨歩は微笑し。

「先生は唯禱れといふ。禱れば一切のことが解決するだらうか。それは實に容易な事である。しかし私は禱れない。祈る文句は極めて簡易。而かも祈の心は得難い。私の求むると

ころは、その祈り得ぬ心を救つて戴きたいことです。それです。衷心から禱を捧ぐることを得たならば、その時は初めて直ちに救はれ得るだらう」

そして彼は恩師の手を握つて泣いた。

獨歩はいかなる場合でも自からを欺けない人であつた。

植村牧師は、たゞ黙つてその愛弟子の眞實の心を読んで、同じく瞳の底から湧く涙を抑へ得なかつた。教會に歸つて、家人に向つて言つた。

「あゝ彼は救はれた。祈り得ないと云つて泣いた國木田君の態度は我等の求めて已まなかつたものだつた。併し、彼は遂に不幸な人であつた」

その教會にはいたましい獨歩の戀の記録が残されてゐる。彼は時々瞑想して、その第何列目の何番の椅子に坐つてゐた妻の信子が、そこを立上つた時のことを思ふた。

「僕は、男子席の前方にあつて、植村牧師の説教の中に溶け入つてゐた。その時僕の手から遁げやうとする信子が余の後列の椅子にそわ／＼とした心をわざと平氣を装うて、牧師

の説教も上の空なる定まらぬ瞳をしてゐた信子その時が想起される」とよく話をした獨歩が私の目の前に泛び来る。

岡本の手紙

小説「牛肉と馬鈴薯」の中の岡本は、彼自身のことである。國木田獨歩の思想は簡約してこの小説の中の數頁に盡きる。彼はその中に次の如く記してゐる。

「わが願は世の常の願に非ず。この願ひの叶ふ時はいつなるべきか。わが命の此世にある間、叶ふまじと覺ゆる。もし然る時は、われ五十、七十、百歳の壽を保ち得んも、そは空しき夢の命のみ、われは此世の人の命をば夢の如きものと觀ずることなきにあらねども、人生は眞面目なるものなりといふ信念ぞかし」(牛肉と馬鈴薯)

「古池や蛙とび込む水の音」に豁然大悟した俳聖の悟りでもない。色即是空と徹底した佛者のそれでもない。彼は現實を通じて、天地の大法を見んとし、事實を事實として、そこ

に永遠の摂理を窮めんとしたのである。

彼は小説「牛肉と馬鈴薯」に於て自からのこの切なる願を次のやうに説いた。曰く

「この願とは何ぞや。如何なる願ぞや。」

わが戀は遂げ得て又破れたり。わが妻、これを捨てゝ走りぬ。このゆゑにわが肉と心とのなやみしこと幾何ぞや。今も今とてわが心はこの傷に苦みつゝあり。今もなほ、をり／＼神に祈ることは彼人の心に眞の情の泉ふたゝび溢れて流れ、わがこの傷を清め醫さんことなり。されどこれわが切なる『この願』に非ず。詩人たらんことにや、あらず。大政治家たらんことか、あらず。宗教家たらんことにや、あらず。これらはわが空想のみ、夢想のみ。『この願』には非ず。愛と信と義とを完うせんことにや、あらず。君子たらんこと、聖人たらんこと、偉丈夫たらんこと、これ皆『この願』にはあらざるなり。

山林の自由の生涯にや、嗚呼われは實に山林の自由を希ふものなり。わが血はこのため

に躍るぞかし。山林に自由存す。われ此句を吟ずる時、わが筋肉の波立つを覺ゆ。言ふ可からざる誇、まなじりの光となる。されど、これ亦、わが切なる『この願』にはあらず。嗚呼然らば、この願とは何ぞ。

父母いたく老ひ給へり。此世に在す命も長かるべしとも覺えず。一日も永く壯健に在せんことはわが願にぞある。されど、これとてもわが切なる『この願』にはあらず。

宇宙は不思議なり。人生は不思議なりと人も言ひ、われも言ふ。科學と哲學と宗教とは此不思議を滅さんと力む。わが願も亦、科學者として、哲學者として、宗教家として此不思議を闡明せんことにや、あらず。これわが『この願』にはあらざるなり。然らば何ぞや、わがこの願とは。

美と眞と善と、わが願はこれを求めんことに非ず。若しわが『この願』叶はずんば、美も善も眞も、空のみ、影のみ、まぼろしのみ、題目のみ、稱呼のみ。

カーライル曰く

Awake, poor troubled sleeper:

Shake off thy terpid nightmare-dream.

わが切なるこの願とは、眠より醒めんことなり。夢を振りおとさんことなり。

この不思議なる、美妙なる、無窮無邊なる宇宙と、此宇宙に於ける此人生とを直視せんことなり。われを此不思議なる宇宙の中に裸體のまゝ見出さんことなり。

不思議を知らんことに非ず、不思議を痛感せんことなり。死の祕密を悟らんことに非ず、死の事實を驚異せんことなり。

信仰を得んことに非ず、信仰なくんば片時たりとも安んずる能はざる程に此宇宙人生の有のまゝの恐ろしき事實を痛感せんことなり。

われはわが心の眼に厚き膜の覆ひ居ることを感じつゝあり。われは夢魔の支配のもとにあることを感じつゝあり。これを感じ得たるはまことに神のめぐみなり。今はこの膜の破れんこと、夢魔を追ひ拂はんことを切に願ふにいたりぬ。

この宇宙ほど不思議なるはあらず、はてしなきの時間と、はてしなきの空間、凡百の運動、凡百の法則、生死、而て小さき星の一なる此地球に於ける人類、其歴史、げに此われの生命ほど不思議なるはなかるべし。これ誰も知る處なり、而て千百億人中、殆んど一人たりとも此不思議を痛感する能はざるなり。友人の死したる時など、獨り蒼天の星を仰ぎたる時など、時には驚異の念に打たるゝ事あるは人々の經驗する處なり。されどこはしばしの感情にして永續せず。わが願は絶えず此強き深き感情のうちにあらんことなり」(牛肉と馬鈴薯)

彼は明治の生んだ一個の小説家であつた。しかし彼はより良く日本の生んだ初めての新しい一個の青年であつた。瀧澤馬琴に非ず、井原西鶴に非ず、近松門左衛門に非ず、頼山陽に非ず、萩生徂徠にあらず、芭蕉にあらず、蜀山人にあらず、紅葉に非ず、露伴にあらず、逍遙、漱石にもあらず、一個獨特の人、國木田獨歩であつた。彼は彼目からいふが如く、「日本の生んだ初めての新しい青年の一個」であつた。彼は或ひは洗練せられない豔

であつたであらう。しかし輝く寶石の如く汚れざる魂を持つて生れた。彼は遂に「獨立獨歩」であつた。

新聞の編輯長

明治三十四年、私が初めて獨歩を識つたころの彼は、京橋紺屋町近傍の民家の二階に編輯局を持つ小新聞、民聲新聞の編輯長だつた。政友會の濃厚な空氣——といふよりも星派の機關紙であつた。星亨といふ一個怪奇な存在を今日の若い人々は想像もし得ぬであらう。

當時我邦の政黨政治家の中パリストル星亨は、さきの農商務大臣であり、衆議院議長であり、一派の領袖として倣岸で、剛服で不屈の一快漢であつた。獨歩がどういふ機縁によつてかれら一派の機關新聞に投じたかは知らない。變なところに反撥心を出し、一面俠義に富んだ彼が、大新聞に對する不満と毀譽紛々たる彼の爲めに進んで民聲新聞の創刊に協力したといふのが當つてゐる。主筆の佐久間秀雄は三叉門下の俊才で、植民論などを翻譯し、きびくした青年であつたが、或はこの人の推薦で入つたのかとも思はれる。

民聲新聞は星亨が刺客伊庭想太郎の爲めに、東京市會參事會の一室で刺殺されて間もなくその看板を下した。その前獨歩はそこを新聞記者としての最後の幕として、退社後は赤坂氷川町の浪宅にあつて、専ら讀書に耽り、創作を初めた。

小説家獨歩の歩んだ道

獨歩は創作家として後日その才名を謳はれたが、そのころまでは、新聞記者として國

民、報知等に政治、社會方面の記事をば擔當した。最初から文學者、小説家として立つ自分を考へたことはなかつた。勿論「國民の友」の編輯者として、當年文壇の人々と交渉があつたには相違ないが、田山花袋以外に作品について互ひに胸襟を披いて談じ合ふた友人は持たなかつた。同じ國民新聞社の中でも、蘆花と親しくしたのは後年のことである。例の調子で彼は高く自からを持して居た。

親友社一派——根岸派などいふ小説家の仲間入もせず、どつちかと云へば藤村らの文學界一派に近い傾向は有つてゐたが、これらの文士とも肌合が合ふべくもなかつた。冥々の中に、文壇の一方の雄たる徳富蘇峰の大傘下に引つけられたのは、彼にとつて最も自然らしく、その思想傾向も民友社は當年の有爲の青年の登龍門たる第一關門だつた。しかし彼の自尊心は、そこにも長くその束縛を受くることに甘んぜずして、いつしかその名の如く、才藻を抱いて孤行獨歩した。

「民聲」退社以後の彼の小説は民友社時代に比べて一段と進境があり、その思想及その表

現も圓熟した。彼は断へず文壇の現状に對して不満を有つてゐた。當時の文壇人の無氣力に對しても憤慨した。彼等の戯作者じみた態度を罵つた。

彼は亦しばしば代議士を夢みた。一時千葉縣から立候補するとの噂もあつた。勿論これは噂に過ぎなかつた。が、その噂の種は彼が生んだのだつた。千葉から立候補する、と本氣で友人間に布れ歩いたことがある。文章報國、即ち彼は本氣で文章を以て皇國日本の姿を世界に顯揚すべく考へた。日本の持つ歴史、日本人の持つ性格、日本人の理想、而かも最も高尚な思想、醇化練成された新日本魂、それを文學を以て表現せんが爲めに、一面、政治學の研究を志し、同時に彼は一大政治小説の作者たらうと考へた。

「雪中梅」や、「佳人の奇遇」や、「谷間の姫百合」等、それらの作者末廣鐵腸、柴四郎、末松謙澄等が、政治小説と銘打つたこれらの作に嫌焉たる彼は自から一大政治小説の作者たるべくまづ身を政治家に投すべく考へた。しかし、それも一時の熱で、すぐ元の冷靜に還つた。彼は遂にその天分の命ずるところに赴いた。彼は短篇作家としてそこに自己に與へ

られた或者を見出した。「牛肉と馬鈴薯」「富岡先生」「酒中日記」「竹の木戸」「暴風」「戀を戀する人」「渚」等の彼獨特の舞臺が待つてゐた。

彼の天才は、そこ四五年間に爛熟した藝術心の上に閃めき與へた。以上の代表的作品が續々と發表せられた。それは人々の心と心に響き渡るものであつた。彼は晩年目ざましく活躍した。彼の文學的生涯はかくて充實した一生となつた。若くして逝つたその短かい活動も、悔なき幾多の業績を残した。

前半期の獨歩

「親父の脛を嘔りながら二十一才まで東京で煩悶を行つてゐましたが、それも出来なくなりまして、遂に矢野龍溪先生の推薦で、先生の郷里豊後の佐伯で英語の教師をやつて一年計り居りました。此靜閑なる一年間に自分は全く自然の愛好者となり、崇拜者となり、ワルツワースの信者となり、明けても暮れても溪流、山岳、村落、漁村を漁り歩き、溪

もを横ぎる雲に想を驅せ、森に響く小鳥の聲に心を奪はれ、そして同時に「牛肉と馬鈴薯」の主人公岡本誠夫の煩悶と同じ煩悶を續けてゐました。其當時です、徳富蘇峰先生に書狀を寄せて、自分は最早や政治には少くとも趣味を有たなくなつたと言ひ送りましたら、先生から教訓の意味の返事が來たことがありました。實際是れほどまでに自分の心が現代の問題から離れて了つたのです。そこで一年ばかり教師をしてゐる中に、生れついでこの勤の念が抑え切れず、遂にまた東京に飛出して來て徳富先生の民友社にもぐり込んだのでした」(佐伯以後の日記から)

獨歩の前半生は彼自からがかくいふ通りである。民友社に入つたのが明治二十七年、時正に日清戦争が始まつたので、彼は従軍記者となり、海軍方面を擔當し、千代田艦に便乗して觀戰の記事を送つた。かくして彼の文章生活はやがて文學方面に進展し、明治三十四五年頃から本格的に小説の領域に入つて行つたのであつた。

明治文壇の生活線

前田木城が近頃その舊作を集めて「明治、大正の文學人」といふ本を出した。その中に「金一圓の原稿料」といふ項がある。

それに二葉亭の翻譯原稿料一枚一圓が高い安いで、本屋と紹介者とが談判し合うたことが書いてある。

明治二十年頃、明治文壇の曙明期に、既に一家を成した二葉亭四迷の原稿が、明治三十八年に至つて、一枚一圓が高いといはれたことが今日から見れば、全く嘘のやうな話である。

金の價值から云へば、當時の一圓は今の十圓に相當すると、太閤さん時代の大判小判を今の時價に換算していふのではないが、全く當時の文壇人の社會的地位は慘めであつて、とても追つきつこはなかつた。私の知友中にも事實、餓死——といふよりも窮死した人々

あつた。今にして之を回憶すれば、愴然として涙の下るを禁じ得ない程である。

獨歩の例にしても、彼は遅筆であつた。一行一章といへども容易に筆を下さなかつた。

一つの腹稿を得れば長い間にこれを胸裏にねかして置いて、やつと筆を執つても懊惱呻吟した。萬年筆で、原稿紙に直に書下すやうなことは滅多になく、丁寧に之を淨書した。

「牛肉と馬鈴薯」も、「酒中日記」も、「悪魔」も、「運命論者」も、私が知る範圍に於ける彼の原稿は半紙に書直して一マルビを振つてゐたことは前述の通りで、その原稿を奇麗に綴じて、いかにも之を人に渡すのは惜しさうであつた。かくも愛惜してゐるその自己の作品が僅かの金に代つて來る時、彼はほとんど泣きたさうな心持であつたらうと思ふ。

事實、當時の世間はこれら名家の人知れぬ苦心を無造作に、金錢に換算する場合、いかにも冷酷過ぎるものがあつたのである。

明治三十四年、金港堂が「文藝界」を發刊した當時、内規として尾崎紅葉、幸田露伴の原稿料は一枚五圓、以下の作家は平均一枚一圓、雜録は八十錢、五十錢位——これが一般

の相場？ としてあつた。それも掲載後に仕拂ふ規定である。それが中々待切れなかつた。編輯者は社長と作者との間に板挟みとなつて困つて居た。それに長いとか短かいとか、長いものは一篇いくらにしろとか、何とか十把一からげの鶴の一言で金港堂の原亮三郎社長はかくして文壇人の相場の目安を作つた。向ひの博文館の例を以てしても、頂から相手にされなかつた。

小杉天外は、一時寫實派の諸作を發表して「初すがた」「魔風戀風」以來、人氣の頂上にあつたが、雜誌小説の原稿料は一圓を僅か二十錢超躍して、聊か優勢を示したに過ぎなかつた。紅葉露伴の二家を除く以外の作家で、彼と此點に於て比肩するものはなかつた——金港堂以外の例は別として。せめては一圓五十錢にしろ、しないといふのでどの編輯會議も、もめ抜いたが、やつと今回に限り一圓五十錢、以後は讀者受によつて定めるといふ特別の條件付で落付いた。

獨歩の「牛肉と馬鈴薯」はこの編輯會議に上る以前、「文藝界」の佐々醒雲が「これは小説

ではない」と一蹴したのに對して、同じ編輯の平尾不孤が強硬に主張して「近代目ざましい作品だ」と抗論したが、到頭否決せられた。が、同じ金港堂の五大雜誌「教育界」に獨歩の「日の出」を載せて教育者間に好評を博したので、同店の各雜誌では競うて彼の小説を載せた「日の出」(教育界)、「畫の悲しみ」(青年界)、「指輪の罰」(婦人界)、「團遊會」(臨時増刊團遊界)、「從軍記者」(軍事界)、「惡魔」(文藝界)、「馬上の友」(青年界)、「空知川の岸邊」(青年界)、「一家内の珍聞」(婦人界)等がそれである。

以上は明治三十五年、同三十七年の三年間、私が金港堂に在社當時のものである。間もなく第一「獨歩集」の出版を見て私は郷里に歸つた。其頃、彼は「戰時畫報」を發行し、次で獨歩社を創立し、「新古文林」、「婦人畫報」などを出した。そして私に「田舎教師」(新古文林)や、「號外」(新古文林)の載つた雜誌を送つて來て居た。

嗚呼、獨歩逝く！

獨歩は逝つた——明治四十一年——。その臨終に侍した眞山青果は、

「吾が崇拜する國木田獨歩氏は今日——六月二十三日午後八時四十分相州茅ヶ崎南湖院第三病室に瞑目せられた。

故人の遺志もあり、且つ家族の人々も屍體室に移すに忍びずとて、遺骸は收二氏と二人して之を擔架にのせて、露の眞黒な松原の中を別荘へと移した。別荘とは獨歩氏入院後家族等の假に棲はれた海濱の小屋にて、同氏は一度も見られたことはない。屍となつて初めて自分の家に歸られたのだ。

この通信は午後九時四十分、その六疊の間、遺骸の枕頭に誓書く。

旅の上、知る家はなし。夜は更けたり。屏風その他の用意もない。軀を北枕に直して、蠟燭一臺、香爐一縷、白いハンケチを顔に獨歩氏は合掌を胸に合せて、白餅のまゝ靜か

に床上に横つて居る。

母堂まさ子、夫人治子、令弟收二氏、同夫人賛子、きみ子、青果の六人、寂しく通夜す令息令嬢嚴父の死も知らず小さな躰して次の八疊の蚊帳の中に眠つて居られる。

嗚呼獨歩氏逝く、明日は友人知己の人にも知らるべし、諸方に打電す。(病床録)

眞山青果は獨歩にとりては最も日の浅い知人であつた。獨歩が南湖院に移るや、青果は、小栗風葉の紹介にて、その枕頭記を讀賣新聞に寄すべくほとんど初めて彼の聲容に接した。兩人は直ちに相解諾した。而して之よりこの一病人人は絶対に青果の技倆と人となしを信じ、身邊の一切を擧げて青果に任した。青果はよくその友情に酬ひた。

梅雨ばれの炎威燦くばかりの夏の陽、いつしか西に落ちて、洛北の緑、煙霧に没せんとしわが書樓の碧紗を揺がす涼風除ろに來るところ「獨歩と武蔵野」を書いてこゝに到り、

萬感胸に迫る。

筆を投じてひとり険の故人を偲んでゐる時、白川に近き法然院の杜は黒く浮び、その森の夕霧の中から、クツボクツボと山鳩が啼いてゐる。

「獨歩と武藏野」終

昭和廿一年十月五日印刷
昭和廿一年十月十日發行



<p>獨歩と武藏野 【定價 拾九圓】</p>		<p>著者 齋藤 弔花 <small>サイトウ ヌヨウ カ</small></p>	<p>發行者 吉田信造 <small>京都三條廣道東</small></p>	<p>印刷所 河北印刷工業所 <small>京都一八六 京都二條通堺町東</small></p>	<p>配給元 日本出版配給株式會社 <small>東京市神田區淡路町二ノ九</small></p>	<p>發行所 見文社 <small>日本出版協會會員番號A第二一〇七三號 京都市三條廣道東 振替京都一一九一五番</small></p>
----------------------------	--	---	--	--	---	--

105-





914.6
S1251

終